

## 劇団SCOT×レスツ・クスマニングルム(インドネシア)

### 『エレクトラ』第3回報告書〈成果発表〉

#### 内野儀

第2回報告書で書いた訪問から約1週間後の2021年11月27日から28日の本番当日、筆者は利賀村に滞在した。その期間、当該オペザーパー業務の対象作品である日本・インドネシア共同制作『エレクトラ』の公演(27日13時および18時15分から、利賀大山房)、および同時に上演された『新版・津軽海峡冬景色』(27日15時30分および28日13時から、新利賀山房)の4つの上演に加え、鈴木忠志氏によるトーク(28日10時より)に立ち会った。

今回、共同制作の対象となった『エレクトラ』について、ここで簡単に触れておく。本作品のテキストは、ギリシア悲劇のソフォクレス(前496頃～前406頃)と19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したオーストリアの劇作家フーゴ・フォン・ホーフマンスタール(1874～1929)によるテキストを使用している。

鈴木氏によって構成された台本は7場からなる。登場するのはクリテムネストラ、エレクトラ、クリソテミス、オレステス、それに車椅子の男、看護婦、医者である。名高いトロイア戦争後、ギリシアのミュケナイに帰国したギリシア軍総大将のアガメムノンは妃のクリテムネストラに謀殺される。10年に及ぶ戦争の期間中、アイギストスという愛人と関係していたことが、その大きな理由である。アガメムノンとクリテムネストラには娘のエレクトラとクリソテミス、息子のオレステスがいる。父の死を契機に命の危険を感じたオレステスは逃亡し、クリテムネストラは娘のエレクトラを冷遇する。しかしやがてオレステスは帰還することになり、母と愛人を殺害し、父の復讐を果たす。

このオレステスの復讐物語はギリシア神話のなかでも有名なもので、ソフォクレスだけでなく、ソフォクレスとともにギリシア三大悲劇詩人と呼ばれるアイスキュロス、エウリピデスも題材にしている。一方、西洋近代における古代ギリシアへの新たな注目という時代背景のなか、今回使われているテキストの作家ホーフマンスタールは、1903年にソフォクレスのテキストを原作とする翻案した戯曲を上演。そのテキストを作曲家リヒャルト・シュトラウスがリブレットとして用いてオペラとして作曲。オペラ版は1909年に初演されている。

このホーフマンスタール版によるテキストについて、鈴木氏は以下のように書いている。

ギリシア悲劇を下敷きにしたこの戯曲の特質は、アトレウス一家の女性たち、当主のアガメムノンを殺した妻クリテムネストラとその娘の二人、エレクトラとクリソテミスという三人の心情を、現代人にも説得力あるものとして描きわけているところにある。すこし冗漫ではあるが、狂気というものの萌芽はこういところにあるのかと想わせるところは見事なところがある。世界は病院であり、すべての人間は病人である、という私の舞台作りの発想からすれば、いささかびつたりのものであるが、その印象をもたらす最大の要因は、この三人を閉じられた「家」という状況のうちにおき、それぞれの想いの違いを克明に描いたところにある。その想いは会話のなかに表れてくるのではなく、ほとんど独白という形で激しく語られてくる。そしてその内容はすべて不在の息子であり兄弟であるオレステスの生存と帰還をめぐるてなされているのである。そのためもあって、副題を「オレステスを待ちつつ」にしたのだが、ともかく、この女性たちの存在の現在と未来は、不在のオレステスとの関係のあり方に規定されている。一人は息子に殺されることに奮え、一人は弟が母を殺してくれることを願い、一人は兄が死ぬことによってこの状況が変質することを夢想している。〔演出ノート 妄想の顛末・オレステスを待ちつつ〕<https://www.scot-suzukicompany.com/works/05/>〕

ホーフマンスタールが近代的な人間の内面というものを想定し、それが「ほとんど独白という形で激しく語られてくる」ことが、本作の大きな特徴であると鈴木氏は考えていることがここから見て取れる。しかもそれが独白という形式をとるため、「世界は病院であり、すべての人間は病人である」という氏の発想に、「いささかびつたりのもの」なのだ、という。

人間は解決不可能な状況、この場合は三人の女性たちが捕らえられている状況だが、さらにそれに、病人として隔離されている数人の男たち＝コロナを加え、その状況を変更しうる力が自分自身に欠落していると感じているとき、人間はどのような精神状態と言動を展開するのか、それをもっとも鮮明に舞台化できる方法は何かを追求したことが、今回の演出の一番の眼目である。(同上)

その結果、「相も変わらぬ、車椅子と看護婦の大々的な出場ということになった」と鈴木氏は続けるが、「相も変わらぬ」かどうかはともかく、この「車椅子と看護婦の大々的な出場」というのが、鈴木氏の演出における大きな特徴となっているということが理解できる。さらに、本作では鈴木氏自身が以下で説明するような、きわめて重要な演出上の工夫がある。それはライブの打楽器の演奏であり、その打楽器奏者が常時、舞台上にいるという演出である。

この舞台だけの独自の演出手法も導入してある。打楽器による生演奏が加わったことである。かなり激しい打楽器の音と、開幕から最後まで打楽器奏者が舞台に存在していることである。打楽器の音とともに俳優たちは激しく動き回るが、その音は動きの伴奏ではなく、彼らの内面の叫びとして空間に飛び出し充滿する。だから、すべての登場人物の動きを導き出す演奏家の身体も、この舞台の主役の一人になっているといってもよい。おそらく演奏者がこれだけ主役の俳優として存在した舞台は、世界の舞台の歴史の中でも珍しいのではなかろうか。(同上)

これを読めばわかるように、打楽器の演奏は俳優の動きの単なる伴奏ではなく、「彼らの内面の叫びとして空間に飛び出し充滿する」ことがもくろまれるのである。これはそう簡単には達成できないと一般的には予想されるが、初演時より、日本を代表する打楽器奏者である高田みどり氏が上演に参加することで、鈴木氏の演出意図が見事に実現することになった。そして今回ももちろん、高田氏が参加している。

以上のような鈴木氏の構成・演出による『エレクトラ』は1995年、利賀野外劇場で初演されている。その後、他の代表的な演目と比べれば、必ずしも頻繁に上演される演目ではなかったようだが、たとえば2007年、鈴木氏は『エレクトラ』をユーリー・リュビーモフ氏(1917～2014)が芸術監督を務めていたロシア・モスクワのタガンカ劇場で演出、その後、同劇場のレパートリーとなったという輝かしい歴史を持っている。

インドネシアとの国際共同制作という今回のヴァージョンの『エレクトラ』では、以下のような配役になっていた。  
クリテムネストラ：齊藤真紀  
エレクトラ：アンディニ・ブトゥリ・レスタリ  
クリソテミス：アガタ・イレナ・ブラディティヤ  
オレステス：ジャマルディン・ラティフ  
車椅子の男：ディアン・ノヴァ・サプトラ、ワヒュ・クルニア、エリック・ノフリワンディ、アフマッド・リドワン・ファジリ、ワシャディ  
看護婦：木山はるか、鬼頭理沙、進真理恵、吉野夏伶、杉本幸、扶蘇未由名  
医者：パンパン・プリハディ  
(敬称略)

このうち、カタカナ表記の俳優がインドネシアからの参加である。

車椅子の男たちによる冒頭のシーンは、手元にある上演台本にはその詳細が記されていない(「車椅子に乗った五人の男たちが登場」とだけある)場面である。ここがまず、インドネシアから参加した男性俳優たちの見せ場となっており、車椅子に乗ったままであかも軍隊のように足踏みをして舞台を行進風に進んだり、意味不明の雄叫びをそろって上げたり、隊列が乱れたり、ほとんどダンス的なとってもいいような、優れた身体性を前提としてそのグロテスクでときに滑稽な動きがしばらく継続する。そして、医者に車椅子をおされたエレクトラが登場し、舞台上の高田みどり氏による打楽器演奏と響き合いながら、上演が進行していくことになる。

上演のほとんどはインドネシア語とインドネシアから参加した俳優の出身地の方言で語られ、日本語の字幕が表示される。クリテムネストラを演じる齊藤真紀のみが日本語で台詞を語る。

ここで特筆すべきは冒頭から続く車椅子の男たちの役割で、彼らはギリシア悲劇におけるコロナであるといえるのだが、鈴木氏の演出では、彼らは、ときに、エレクトラの内面の声を語ることがあるという設定になっている。たとえば、第3場のト書きで、「男たちはエレクトラの内部の声を喋り出す」とはっきりと書かれているのである。そのため、クリテムネストラに自身がオレステスに殺される運命にあることを告げる役割を果たすのは、エレクトラの内面の声としての車椅子の男たちのほうである(第5場)。

ひとりひとりが話す場合には、それぞれの方言で、唱和する場合にはインドネシア語でという原則は維持されており、細かい違いはもちろん筆者には

わからないのだが、何度か聞いているうちに、それぞれの言語の持つ独特の音質の違いというようなものが感じられるようにさえなってくる。

エレクトラはそういうわけで、台詞の量としては第2場と第5場でかなり長い独白を行うクリテムネストラほどではないのだが、終始舞台上に身体的に存在し、高田氏の打楽器の演奏にいちいち身振りで応答しながら、彼女こそが、この劇の主人公であることを示してやまない。そして、エレクトラ役のアンディニ・ブトゥリ・レスタリ氏は、この演出上の難題を見事に引き受けてこなすだけの演技的力量を見せていた。それはまた、終始乱れぬ統率感と、統率されているにもかかわらず個であり続ける車椅子の男たちを演じたインドネシアの男性俳優たちにも当てはまる評言となろう。

ここまで見てきたように、コロナ禍のなか、さまざまな障害を乗り越えて実現した国際共同制作作品『エレクトラ』(鈴木忠志演出)は、筆者の予想をはるかに超える成果を上げた。インドネシアの俳優たちは、第2回報告書で書いた通り稽古のときよりもさらに飛躍的に成長しており、利賀芸術公園の恵まれた環境のなかで、創作にだけ集中して生活を続けられるからこそその結果だったと考えられてよい。

なお、記述したように、公演は2回行われ、合計301名の観客を動員した。季節の変わり目の利賀村に、これだけの観客が訪れるのも、鈴木氏の長年の功績によるところが大きいと思われるが、今回の国際共同制作作品は、観客たちに鮮烈な印象を残したに違いないと筆者は確信している。

SCOTから提供いただいたインドネシア俳優たちのスズキ・トレーニング・メソッドの訓練および舞台写真は、以下、貼り付けるので、参照願いたい。



©SCOT (Suzuki Company of Toga)